



櫻齋房種畫

島鮮堂壽梓

六編下

へ14
2690
18



岡本勘造綴

糀町

芳川俊雄関

六編中

へ14
2690
17



其名も高橋
毒婦の小傳
東京奇聞

六編上

へ14
2690
16





其名も高橋
毒婦の小傳
東京奇聞

六編上

へ14
2690
16



14
2690
16

子安の来

旅人宿梅屋治兵衛

生かぬもは

素婦の小傳

東京新聞

芥川権雄園

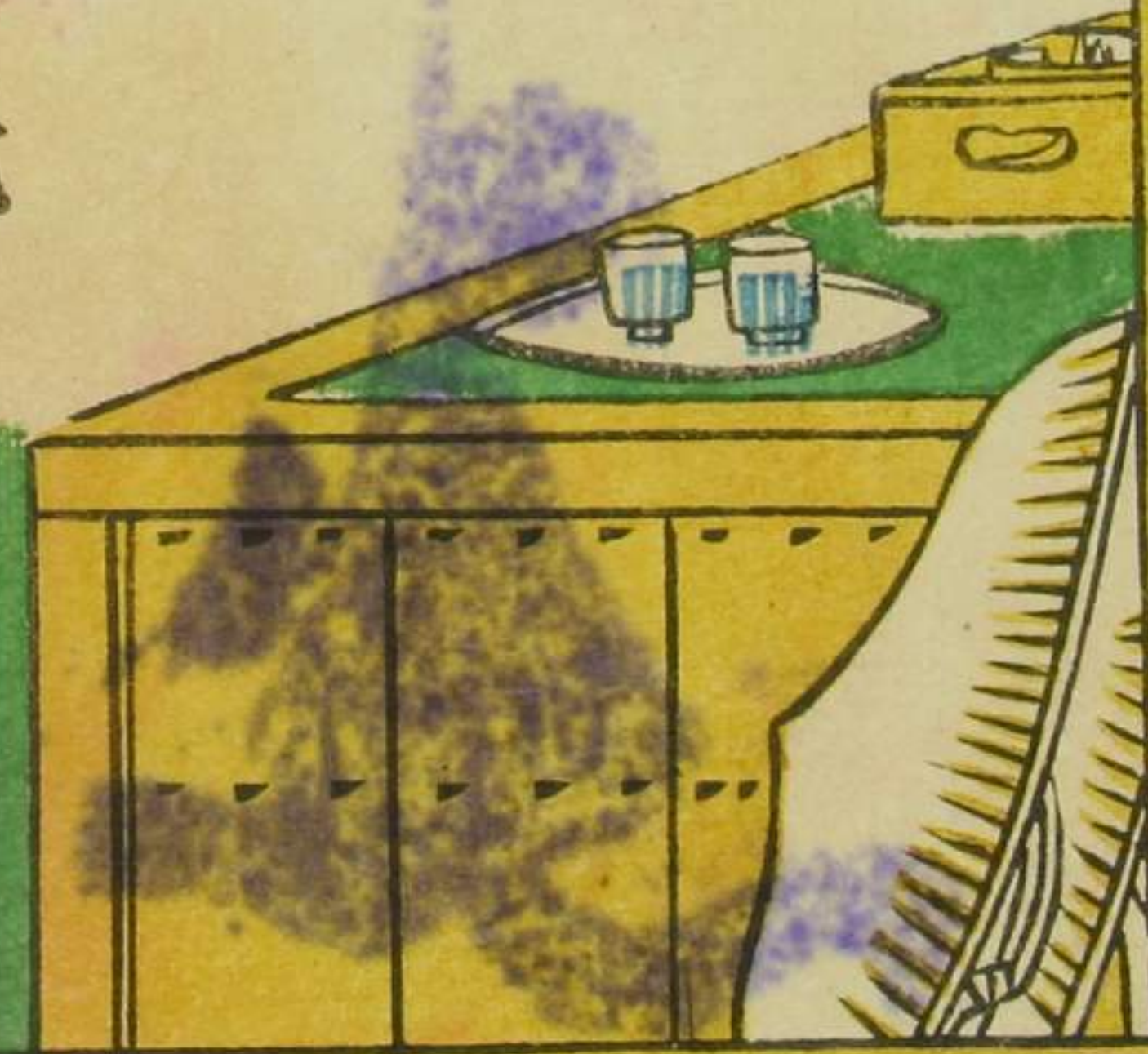
芥六編

園本勲造綴

上の巻

桜島月経画

島鮮堂書



かの傳ハ傳信の傳はと傳記ハ電氣に声が通ひ記者の音ハ
 瀧車ハ縁ふりのうも何でも迅いガ本色とフランクリンガ紙を鳥や
 雲あげと五編までの杜撰を少しも咎め玉のずエレキは
 加減ウレク子の次第にかきむ積極の度ととも川さど
 島鮮堂ガ後をも急い疾くかきよと促がす使ひら度々
 それとワットガ藥罐の湯氣に似てキシヤハ此ガ逆上
 頭痛にちやむ折なれバ氣カセ少一緩めしも六號カハ
 差加る彼高橋の大吏を場所ゆ態々念々入世しそ最早
 フニキリほ程近ひれバ看客に長くハ夕をさせませぬ

明治十二年三月下旬

岡本起泉題





つぎ返せしん今一なるの地券あて
 悪法とゆんとのそありと知るぬ
 演以弁の差るとさうりは森衣
 二夜とつて地券と押しつてまき
 お借お救多きれとのててまき
 際とやめ親殺共が移るぬ
 此の金川が背尾うく
 金と利達といふ共
 けちちを助つてお
 借と返さねばあらぬ場合おあ
 先うと助つられとけりう二百三
 十田の利権がつれしは以上おは合
 めて実い

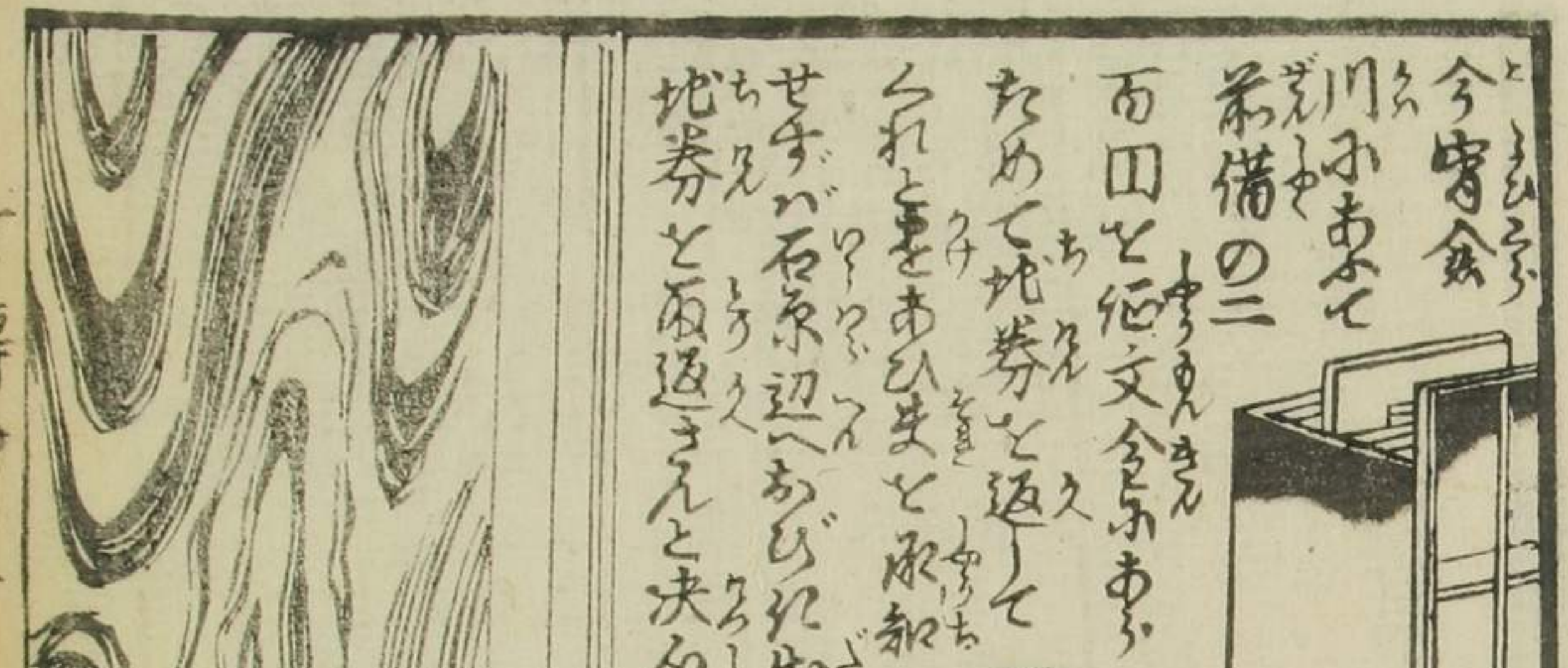
●才、まじもきさうわの
 肝玉おあまうののね母
 しが危あしく
 秘とて由百一の
 出お
 座下
 と
 面知
 小波
 次
 由
 小
 次へ



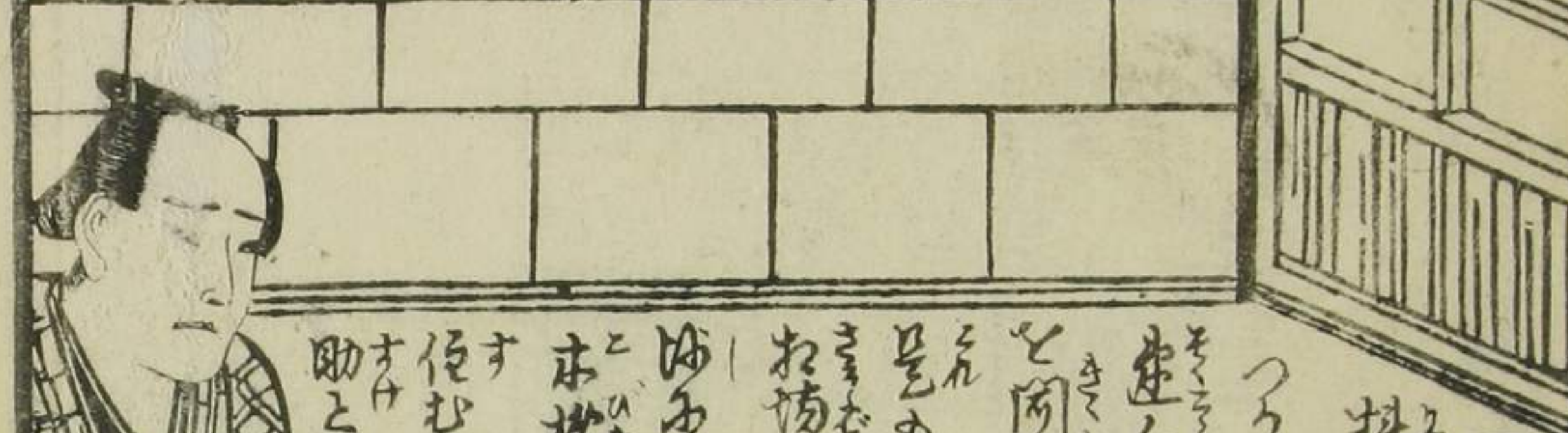
今宵金
 川おあて
 糸備の二
 而田と伝文金ふあ
 ためて地券と返して
 くれとをあひまと承知
 せす、石京辺へおびれ知し令がひ
 地券と返返さんと決るうく

通りと
 是け
 腰中うら合口の
 短刀と有物とてん
 てお借のホ、笑

出お
 座下
 と
 面知
 小波
 次
 由
 小
 次へ



五十田のふ合
 流をそおし
 先にあるら精々
 買ひと探して
 ねとをば見
 せよにす
 の目からきと二百



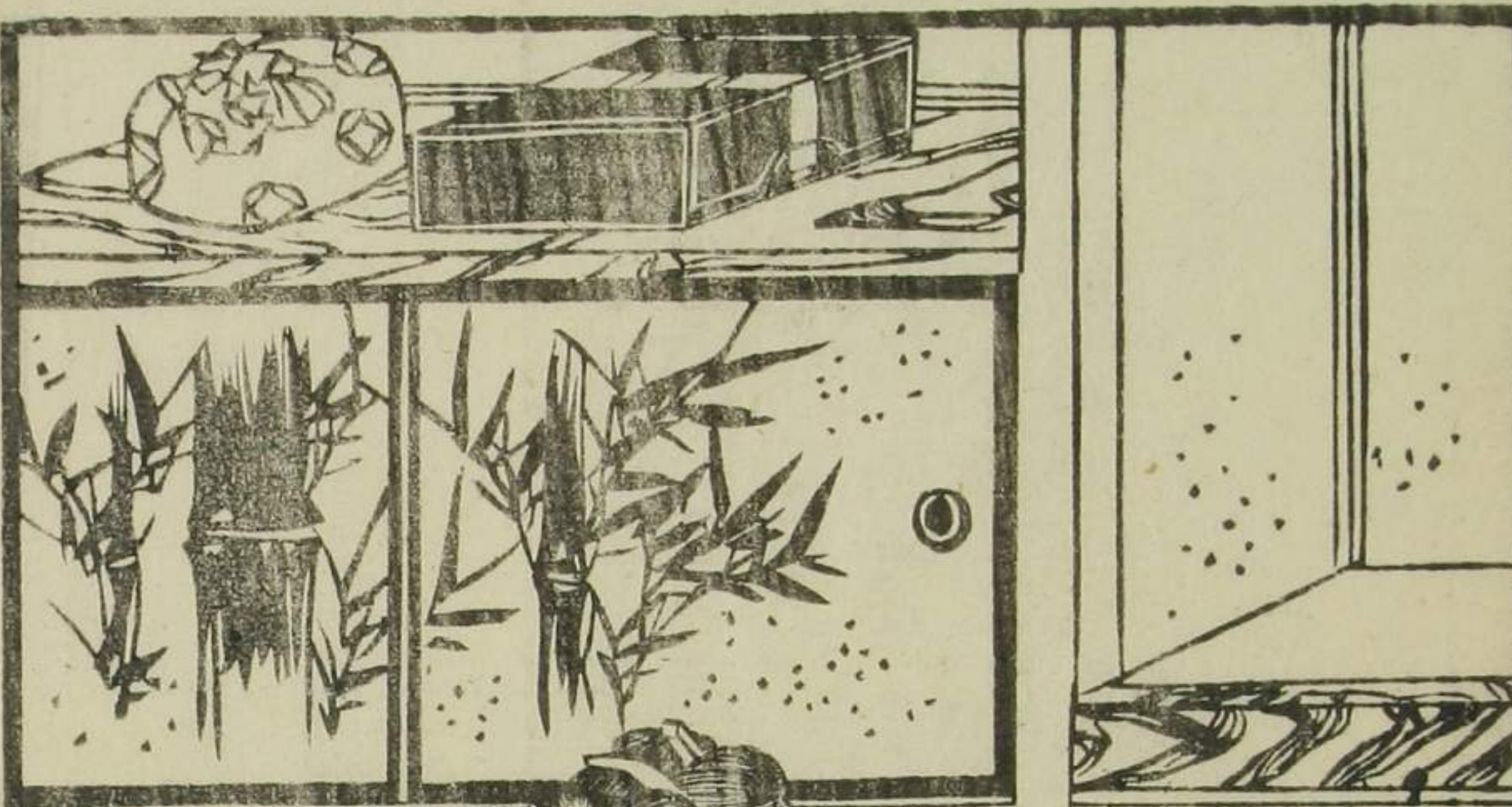
料にもあり
 つんと
 建んあり
 と同合世
 見ゆ
 ね坊
 海あり
 本枕町四丁目
 どの
 助との

小大麻生
 まらら

市
 ち希あり
 備お基の
 貸ゆあり
 生系と世
 後て



佐
 市を希が足分ありといふ
 後山を帰らぬありといふ
 馬食町と丁目のうらや
 佐和今井秀次といふ



大變と云ふ御侍のお服と二夜まで

戴

刀剃刀磨

と業と云ふ

肥ッ
た
脇の
今秀
今と
今と

悪きお
業と
えき
や四盗と

十幸の
暗の
小あふのが
と懲役船を腰小



既ま二夜どまま懲役ちやう後あきお侍
たのめにて
あれが大事を
急あせ小人せうを
身み後ごと秀しゆ決けつの願ねんで
お笑わらふお侍お侍が後ごす
提たを受う取とてままああ姉あねの目めとゆゆええととするすと
お侍お侍の厄やくぶぶと秀しゆさんさん大だいまままま子こ守し扱あふふと
働はたらけの
つけ磨とぎをアイと利きり刀やの
又またと後ごと云いふ
のめねくああうう漏もりりおおハハチチリ
と背せののままれれぬぬ人ひとのの力ちからと人ひとのの性しやうは
やや姉あねののかかんかんままいいあありりががてて人ひとのの性しやうは
ままののぬぬけけ腕うでままのの一ひとまま志しツツをを合あせせ砥と
の合あ意いと外あははささぬぬ膝ひざううぢぢがが若わききも
ゆゆすすいいぬぬるるのの意い底そこふふううけけてても
ああららじじてていいせせややすす姉あねののつつぎぎえ





岡本勘造 綴

芳川俊雄 関

糺町

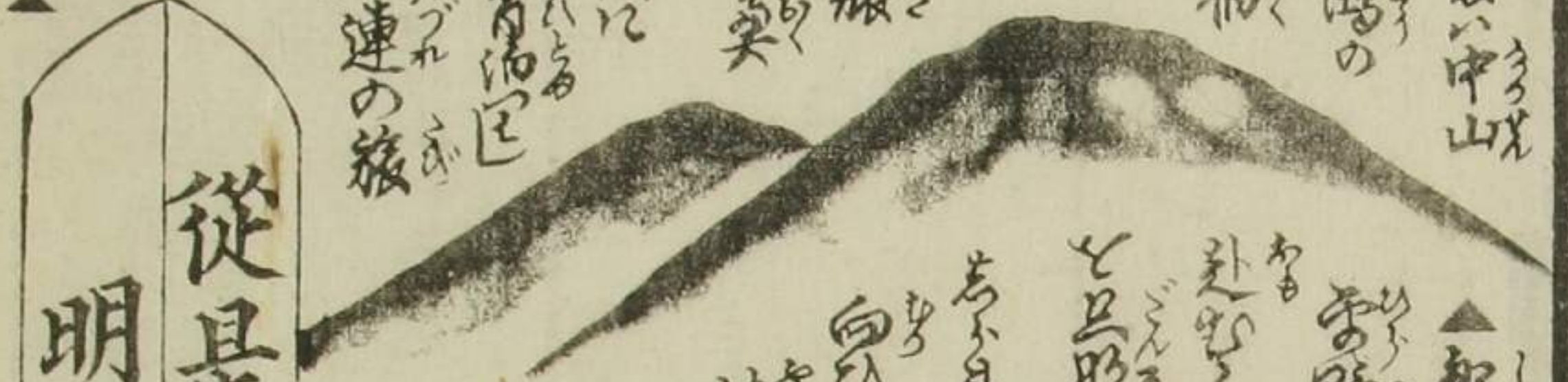
六編中

14
2690
17





○後中山
道邊の
巢宿
の小
池と
の縁
の裏
の裏
今宵泊区
三人連の旅
人の
すこ



▲船にお供と実食供と入るの車でも虎が痛のと云ふも
茶の葉と伴ふて天麻生 事ゆゑ茶の買付てある天麻
赴く途中でお供の茶葉生と伴ふて熊谷うら茶と親しく
と足形くと教まふ金の威光と あり子と問ふお供の茶とのあつら
あるはたり以時茶葉のお供水 不工熊谷うら茶で今日熊谷まで
白の天祥橋であらまふ長 仍て茶の取引の明日のこゝろへ向ても
休むとまられば舟の内は 明日の内ゆへ漢が出来ますまは三月と
熊谷までゆくのこゝろで かつてもまは今日熊谷
あつらねた風のふち 曆の二月二十日山の巻
いもあしあまが 白あしあまが

從是北 中山道鴻巣驛
明治九年三月

々傳六



北より南と云ふ

新婦結小幡

東京青岡

六海中の巻

芥川俊雄園

思ふお供

横濱府経虫

為鮮之産

つぎ 夕方の別てきさう強い
くさ四里八町の懸合捲の狂言
巻物とありてあへてあへて
ありませうといふ彩

ト女がお風呂にぬい
まきまきの業内お茶女の内



お徳の又
すとのつぐ
お徳の又

お徳の又
すとのつぐ
お徳の又

お徳の又
すとのつぐ
お徳の又



又依七と共々か
風呂に介
お徳の又
すとのつぐ
お徳の又

お徳の又
すとのつぐ
お徳の又



ついでに

甘茶

の子供

の色

の換

下の

中の物

云々と

ます

中山道天
 神橋の立
 場茶屋福
 島屋繁栄
 之図

△のうま
 佐七さんと
 お供が云の
 むるれが
 佐七も云
 儀のおい
 ばり
 には
 めて

上へ



まこのう合

てやう

さのよ

休ん

社

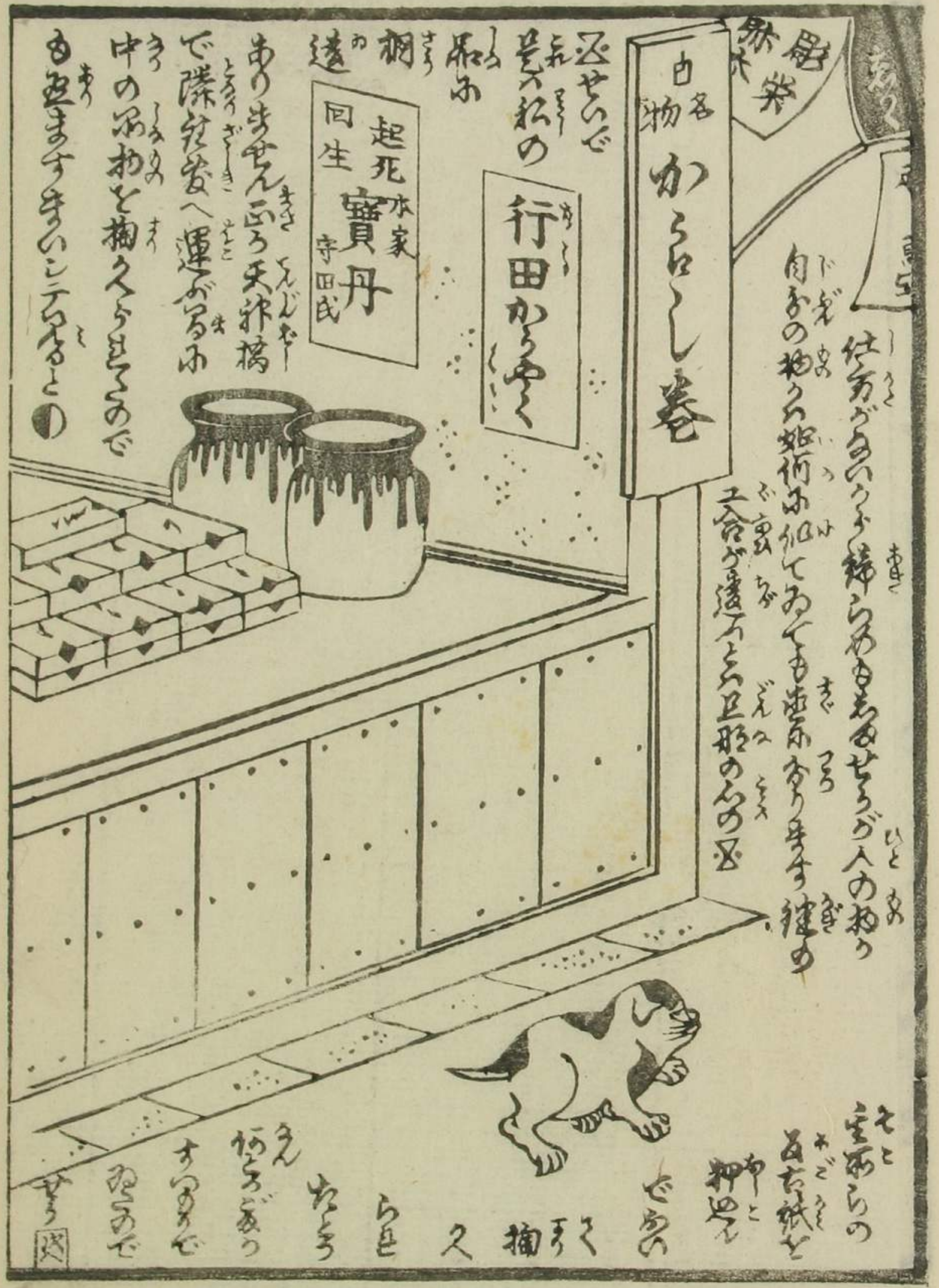
外の人

流

人小

六中

天へ



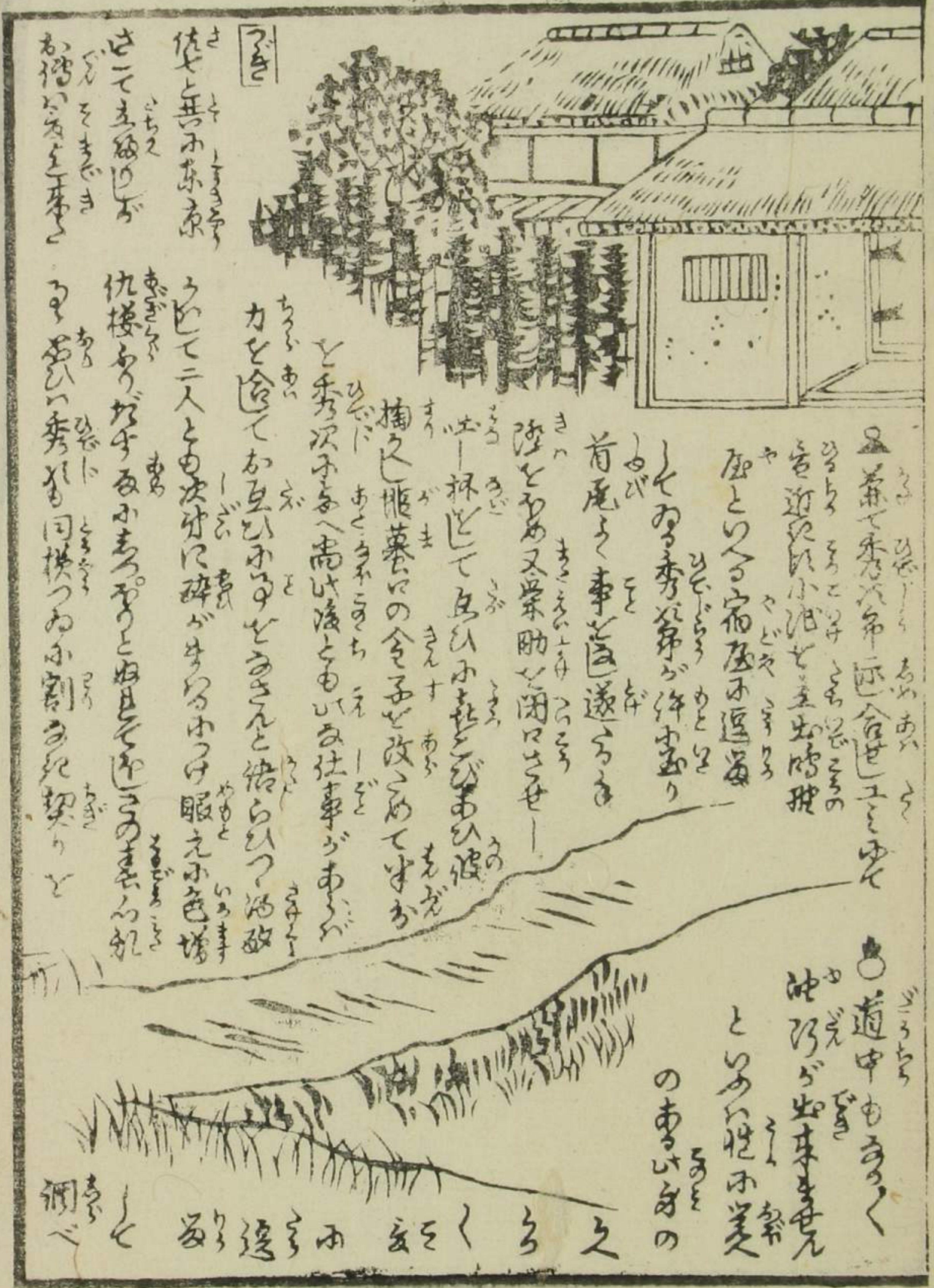


天休橋の男女

生かぬとぞ
天休橋の男女
天休橋の男女

今日巡査がきて
天休橋の男女
天休橋の男女

今日巡査がきて
天休橋の男女
天休橋の男女



天休橋の男女
天休橋の男女

今日巡査がきて
天休橋の男女
天休橋の男女

今日巡査がきて
天休橋の男女
天休橋の男女



つぎ 貴お模の事と回

おのり 赤んぼ 女 母 不 言 由 厭て ぬ 女 坊の



仕立急小 用事とおい 出せと宿 屋と秋

ぶさ却て人用おきてりくもの和やさうな怒公之
ねて舞てお茶に吐しとあいの金の蔓大麻生のはは
弁やぬおしと何とら吐しをつけてまわうらおの一人
衷情と一先お系へおぬりとお情のふれたもこそと
秀次いまいふお情のまうと情の果実の持の事なる
天神の歳くむの方と曲りこそ吾妻村の



声とわい 驚ろるにまじりて
 形もたのめ 持ちし
 あらぬ若者 若れど
 傘とも持たば ぬれに
 妻も心とまら ときあふ
 仔細あらんと 思ふまを尋ね
 手控縁もみれば ぬれま
 通ひまれば 雨と
 と止めん 熱
 美以奴 必定田舎の
 大を 高崎女 舟に 現と
 振し ぬれ せん せん
 あり 後ふ トウと 例る 小七 秀次 へ 通ひ ぬれ ぬれ

東京一區分繪圖全

鹿兒島紀事

命之養生善惡鏡全

島田郎梅兩日記

珍傳々部々一

粉色入小本數品

御所櫻梅松録

大功記銘々傳四冊

新板双

龜地本問屋

龜地本問屋 網島龜吉





櫻齋房種書

島鮮堂壽梓

六編下

2690
18





○辻堂でもあれはふらふらと
 其後の藪に隠れりて
 〇以て其の現れぬる人
 の曲者なりと知りぬ
 寒がりさの肉も肥んで
 〇あつ青二才的きり地へ
 来るであらうと待交の
 細の目減之於麻の煙
 己等の快みおされて
 〇のうさつさといは揚々懐つて
 〇あると実後次第に
 〇かゝるおのれを難
 〇と云ひが





ついでに 枕をく
 内におぼれ
 宿子
 我慢が
 出来ねが

○逃がれよう
 知らねが

○あつちの
 切替とる
 五十四の
 あのを
 横酒
 さげし

あつちの
 切替とる
 五十四の
 あのを
 横酒
 さげし



一寸を
 下してとる

○一寸を
 下してとる
 月を達とて
 ぬの懐
 りにおぼれ
 小五郎
 小五郎
 懐らねが
 抱きつく
 撒きつ
 撒きつ
 彼車
 一散を

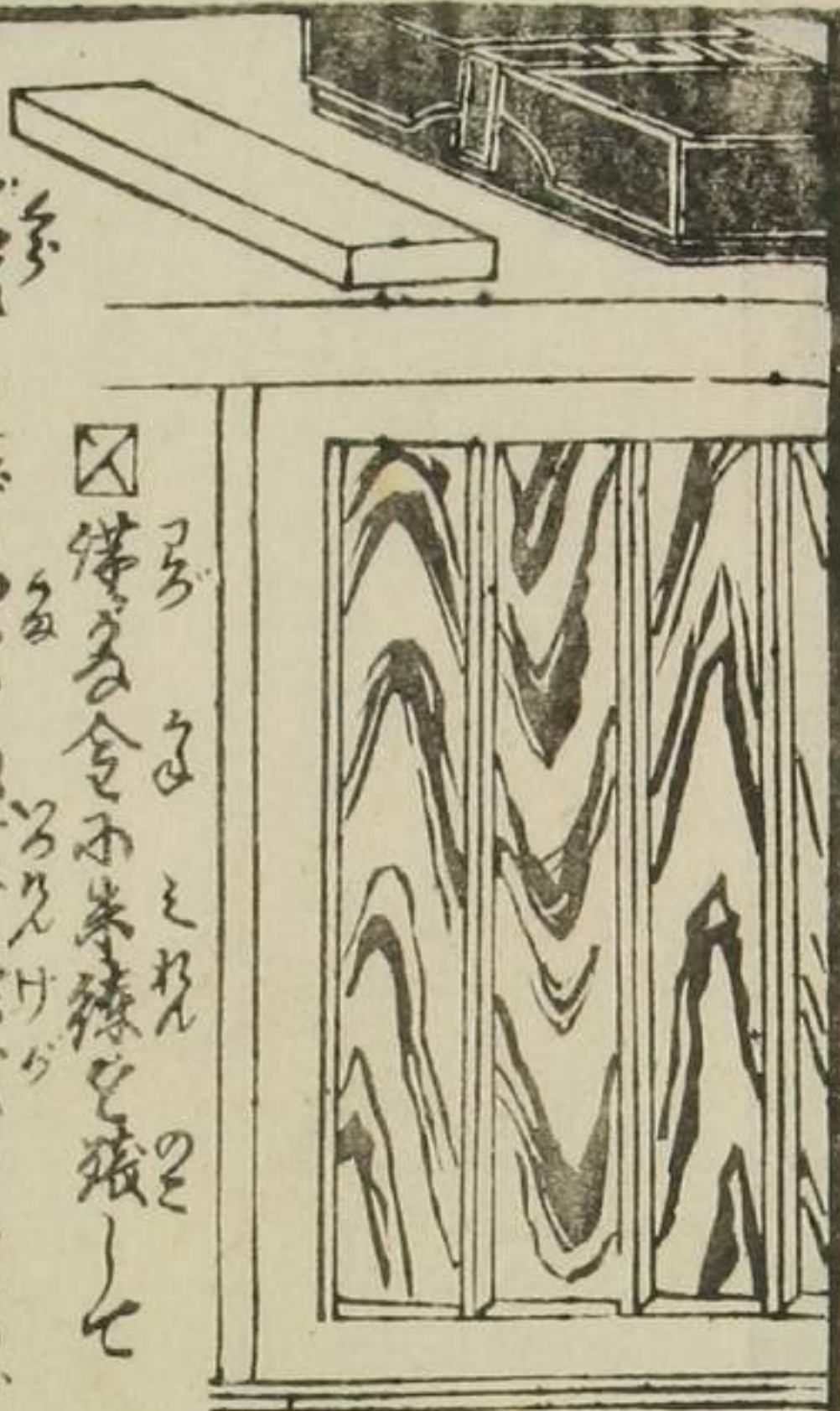
不覚
 赤に
 ぬの
 懐ら
 抱き
 つく

○不覚
 赤に
 ぬの
 懐ら
 抱き
 つく
 撒き
 つく
 彼車
 一散を

又く先考がねがねに
口よりあつた火の煙
ひらり泳ぐ冷たき
云々
あつて女の自で一人旅の
とるころと問ひつた
昨日のてまふ
工んご申受も
火あたる仕度



且那小若
さそ七番
室同換
られてある
に
あつても
前の
吐く
あつても



社会と
まふと拭ひ
あはれむと
金と力
熊谷

家出とせ
ねがね末
の善
若と
と
息子の
後足
既
大骨
次へ

坊主のくさくさの顔は、
 君を助ける力がある。其の方へ
 僕も車窓を眺めて、昔の
 依七へ語りよせ。只、彼れ
 をねがふ市を、彼れが
 依七へ語りよせ。世は、
 知らさねば、其の
 とよへ。一、
 面を、
 ちやんと、
 茶を、
 女房で、
 天神様を、

但し、
 逃さんと、
 せせ、
 高に、
 世合の、
 方の方、
 ぬのの、
 きの、
 らの、



坊主のくさくさの顔は、
 君を助ける力がある。其の方へ
 僕も車窓を眺めて、昔の
 依七へ語りよせ。只、彼れ
 をねがふ市を、彼れが
 依七へ語りよせ。世は、
 知らさねば、其の
 とよへ。一、
 面を、
 ちやんと、
 茶を、
 女房で、
 天神様を、

坊主のくさくさの顔は、
 君を助ける力がある。其の方へ
 僕も車窓を眺めて、昔の
 依七へ語りよせ。只、彼れ
 をねがふ市を、彼れが
 依七へ語りよせ。世は、
 知らさねば、其の
 とよへ。一、
 面を、
 ちやんと、
 茶を、
 女房で、
 天神様を、



於傳六下



高橋
春輝の
小橋

東京奇聞

第六編



芳川俊雄関

岡本勲造祭

梅富貞祥画

高橋半吉作



2690
16-18